

パネルディスカッションの部

〈司会〉

それでは、続きましてシンポジウムに移らせて頂きます。最初に、四人の先生方に講演の補足説明と問題点をご指摘していただきます。発表順によりしくお願いいたします。

〈角田〉

私のテーマは長林寺文書の概要を説明することでした。提示した文書目録は一二二点になっています。皆川先生の報告で使用された「文化八年大般若再勸化簿序」は、この目録には入ってはいません。あくまでも、数年前の鶴見大学文化財学科による調査でマイクロフィルムで撮影した史料をベースに作っているのです。そこで撮影されていないものはこの目録には入っていません。そういった意味では全体像とはいっても部分的なものになってしまっています。現在も調査が引き続き行われていますが、そこで判明した資料もあるので、補充が必要となっています。

「概要」では、中世の武家文書や近世の宗門という柱立てをしましたが、レジユメに目録の文書番号を入れておけば良かったと思います。また、個別に見ていくと、後で作成されたものではないかという微妙な文書もありました。

私は千葉文学館に勤務していて、三年前に千葉県内の寺院文書の整理をしました。天台宗でしたが、長林寺と同じ二〇〇点弱の文書群でした。そこで見た傾向と長林寺の文書群とは基本的には変わらず、江戸時代を中心にして明治時代になると寺領関係の文書が多くなっています。あと、気になったことといえば、何を調査しようとしたかその目的にもよりますが、寺に伝わる法脈を示す血脈や印可などの伝法や教義に係わる資料が目録には掲載されて

いません。それらが今後確認されれば、違った全体像が見えてくるでしょう。

〈関〉

長林寺所蔵文書の中で初期の文書群を五点ほど紹介しました。個々が引き出す問題は貴重な内容が盛り込まれています。時間の関係で端折りますが、五つの文書群は結果的には長林寺の歴史的位置を考えるさいに重要なもので、その中には関口報告でも指摘があるように、伝説の創造に絡める部分として利用される文書もあつたようです。文書が持つ重要性が新たな伝説創造の原点になっていく場面としても貴重です。

岡見以下上杉関係の古文書を整理すれば、関東の政治権力は中世初期から中期以降の問題が、二大権力の問題になります。要するに、鎌倉公方と関東管領の両者の権力がどこに帰着していくのかです。公方家は後北条氏の世界に収斂し、管領家は越後の上杉に収斂していきます。北の越後と南の相模の部分が、相互に常陸大塚氏と小田氏の部分と相互に関係しながら、戦国の地域権力と併在しつつ、あるいは旧権力を利用しながら新たな権力につながっていきます。その部分に岡見一族と東林寺があります。

一つの地域が全国的、もしくは関東ブロックに大変動を与えているということを、古文書から読み解いていく作業の面白さがあります。そこに長林寺古文書の意味もあります。点から線へ、さらに面へという拡大の中で古文書の位置づけが課題となるはずですが。

〈関口〉

同じ古文書であつても、たとえば、長林寺の戦国時代の古文書が江戸時代には封印されてしまっていますが、明治時代以降になって再発見されたりもします。価値の有用性が時代によって変化するのです。日本の近代化と絡みながら歴史を創造していくという問題に結びついていきます。時代によって異なる古文書の価値ということですが。

私が取り上げた由緒書のような史料は、角田先生の資料の「長林寺文書の概要」の時代区分にはうまくなじまないものです。私の今回の報告は不十分なものでしたが、由緒書などの系譜伝承資料は歴史学と民俗学の架け橋になりうる資料として注目されます。今後は、文献・口承を含めた系譜伝承資料などとともに、角田先生の資料でいうなら「本寺・末寺等、関係諸寺院の調査」「山川地域の調査」という項目あたりが、皆川先生がおっしゃったような「多分野の研究の学融合」の視点から必要とされる研究になるのではないでしょうか。関先生のおっしゃった小地域から地域ブロックへ全国へ、点から線へ面へという方法と合わせて、総合的融合的な研究ができれば素晴らしいと思います。

〈皆川〉

まず、長林寺の道了堂について、若干補足説明をさせていただきます。角田先生のレジユメにもあげられておりますが、寛政二年（一七九〇）の「差上申寺中坪数諸堂絵図面之事」は長林寺に伝来する最も古い境内図です。この図をみますと、現在の道了堂の建物は境内の中に入っておりません。したがって、現在は道了堂の管理者は長林寺となっておりますが、この当時には管理者が山川村などの近隣の村であった可能性が指摘できます。この点は道了堂の創建などに関わる重要な部分かと思われることを補足しておきます。

つぎに、宝暦五年（一七五五）の「金剛山顕密護摩祈祷札」です。この札に書かれた「金剛山」ですが、これは長林寺が常陸の牛久にあった東林寺時代の山号です。現在、長林寺の山号は「福聚山」です。

この祈祷札の「金剛山」については、いくつかの解釈ができます。まず、一つ目としては、戦国末期に長林寺は足利山川村に移転しておりますが、山号は元禄時代までは、古い山号の「金剛山」と新しい山号の「福聚山」の両方が使用されています。この点から判断すれば、祈祷札に書かれた「金剛山」は長林寺のことになります。

第二点目として、足利にある「金剛山」という山号の寺院は、足利市の中心街にある鏝阿寺の山号です。鏝阿寺は、足利氏由来の真言宗の寺院です。したがって、祈祷札の「金剛山」は鏝阿寺のこととも考えられます。すると、この祈祷札は長林寺で鏝阿寺の顕密護摩祈祷が行われていたということになります。

第三点目として、道了尊の本山である小田原の最乗寺の由来書によれば、道了尊は井戸掘りをしているとき、この井戸から「金剛宝印」なる金印を発見したとあります。この点からすれば、長林寺は道了尊が流布した寺院というわけで、祈祷札の「金剛山」は道了尊を指す可能性も考えられます。

この「金剛山」の祈祷札は、長林寺の道了堂の壁に貼り付けてあったものであり、「金剛山」の解釈としては第三番目の可能性が高いと思われます。

つぎに、道了尊と天狗信仰についてももう少し補足しておきます。長林寺には、道了尊とならび、境内の各地に天狗にまつわる樹木や石があります。したがって、長林寺には天狗信仰も定着した寺院といえます。この点に関して、長林寺の本寺である群馬県甘楽郡の宝積寺をみますと、やはり道了尊と天狗信仰に関する建物や樹木などがあります。宝積寺と長林寺は、ともに小田原最乗寺の開山了庵慧明の流れをくむ寺院であります。この点につきましては、了庵派の寺院施設などを調査していかなければなりません。曹洞宗の了庵派の展開と道了尊・天狗信仰が深い関係にあったことが創造されます。

この様に、長林寺には道了尊をはじめ、解明しなければならぬ信仰が多いことを補足しておきます。

〈司会〉

皆川先生、道了尊の信仰は長林寺ではいつごろから始まったのか、また、下野国や北関東でどのように展開していったのでしょうか。

〈皆川〉

長林寺文書の中には、道了尊に関する資料としては、天保五年（一八三四）の「大雄山最乗禪寺縁起」など、最乗寺との関係を示す資料しか残っていないので詳細なことはわかりません。ただ、先ほど報告で話しましたとおり、江戸時代中期までには道了堂や観音堂などの施設が長林寺にあったといえます。また、足利市の個人宅で所蔵している文書群の中に長林寺の道了尊との関係を示す資料が数点あります。今後、そうした資料を収集し、長林寺への道了尊の流布について解明していきたいと思います。

つぎに、下野や北関東での道了尊の流布と展開ですが、『道了尊帝都御巡錫記』をみますと、最乗寺の道了尊では江戸の町人やとび職、遊女などにより多数の講が組織されています。この様に、最乗寺の道了尊の信仰は江戸や周辺地域を中心に発展した信仰でした。また、長林寺の道了尊は、最乗寺道了尊の講組織の中には登場しません。したがって、下野や群馬などの北関東では、最乗寺の流れを組む寺院に道了尊が流布し、それぞれの寺院が立地する地域で独自の道了尊信仰が定着していったと考えられます。

〈司会〉

長林寺にはどのような本・末寺関係があったのか、足利地域の末寺や牛久時代の末寺です。さらに長林寺の本寺、群馬県にありますが、宝積寺が本寺になります。資料の地図ですが、五霞村の東昌寺が本寺格にあるべきです。このような関係が江戸時代に作られたと想定されます。

牛久にあった東林寺の位置づけをどうするか。東林寺と長林寺の関係を関先生は地域権力の側面から見られてい

ますが、実際どうなのかヒントを得られればと思います。

〈関〉

現在、東林寺は新地にあります。その東林寺と戦国期の東林寺、そして今の長林寺の関係について調査するため、私と角田氏で現地に行きました。おそらく、牛久沼の対岸にある小茎東林寺は、一キロも離れていないところに旧東林寺があり、新地域に東林寺を作ったのは考えにくいです。東林寺、新地の東林寺はある意味一体の地域と考えたほうが整理しやすいかもしれません。いずれにしても、東林寺から長林寺への移行は大問題です。伝説がらみ、縁起がらみの問題が関係しているので、その整理の仕方です。二つの東林寺問題は議論の方向性が変わってくる気がします。

〈司会〉

東林寺は牛久に作られ、罹災し足利に移った。さらに牛久の同じ場所に東林寺を再興し、金剛寺として作られました。わざわざ牛久から足利に移転し、さらに同じ場所に東林寺を作ったというのが興味深いです。上杉絡みで牛久に移りますが、このへんの話の創作の仕方はどうでしょうか。

〈関口〉

山川の長林寺の由緒書には、牛久の東林寺の跡地に金剛寺が入ったり、新地の東林寺が再興したという話はまったく出てきません。むしろ由緒書が必ず触れるのは、山川には現在足利市西宮にある長林寺の末寺の心通院があったという話です。

また、天正一九年に家康から朱印状をもらって、東林寺を長林寺に変えたという寺号変更の伝承がありますが、資料に書きましたように、「東林寺」の最後の使用例は宝積寺文書によつて確認される元禄七年（一六九四）、「長林寺」の最初の使用例は「報恩院輪住帳」で確認できる宝永七年（一七一〇）です。ですから実際には、江戸時代にはいつてもかなり長いあいだ東林寺という寺号を使っていたわけですね。ただ、元禄七年から宝永七年の間どの時点で寺号を変更したのか、その辺の確定はまだできていません。

でも「長林寺」が使われるようになる宝永七年は、山川長林寺最古の延享三年由緒書を書いた歩嶽の住職時代です。この歩嶽という人物には注目する必要があります。資料に、尾崎先生がお作りになた「長林寺代表」があります。開山から三一世まで住職の名前が書き上げられています。歩嶽、歩諄、歩麟など「歩」を使っている方が何人もいます。歩字の使用は一六世の歩巖徹理が最初ですが、一九世の嵩山歩嶽が住職をつとめてからは、多くの住職に歩字が認められます。法系の問題を考えるうえで、これは重要です。

もう一点注意したいのは、世代表に一四世が二人いることです。そのひとり良源という方は何らかの無作法があったという理由で追放されて、長林寺は関三刹の総寧寺の「上り寺」ということで、総寧寺の管理下に置かれてしまします。その後任の住職がもう一人の一四世良国存久です。この方は、西宮の長林寺や宇都宮の成高寺などと同様、越前の慈眼寺系統の法脈と無関係ではありません。

天正年間における東林寺の移転もしくは永高の漂泊にかかわる関東の勢力地図の激動はもとより、この「歩」字住職と十四世問題、それからまだ詳しくお話できないのですが近世前期までの江戸幕府の宗教政策。私としましては、これらの諸問題をあわせて解明しないといわゆる「ふたつの東林寺」問題も「ふたつの長林寺」問題もはつきりしないのではないかと考えています。いずれにしてもすぐにはかたづけられない問題だと思えます。

〈司会〉

それでは続いて会場からご意見、ご質問はありませんか。矢島先生、よろしくお願いいたします。

〈矢島〉

私はここでは寺史調査を依頼した長林寺の住職として発言させていただきます。このシンポジウムの会場には、長林寺の檀徒総代の皆さんも来てくれているのですが、私たちはこれから寺の由緒や来歴について、じっさいどのように説明していったらよいのだろうか、ちょっと悩ましい問題を抱え込むことにもなったというのが、本日の先生方のご発表をうかがったの正直な印象です。

ところで、長林寺では、朝課の祠堂諷経のなかで、じつはずっと開基として岡見左近将監の名を唱えてきております。岡見左近将監は、法名を長林寺殿竹叟賢公大庵主と申しますが、今日までこの法名を開基名として一貫して唱えてきているということです。長林寺殿はもちろん、もとの東林寺殿を改めて、そのように唱えているわけですが、これは長林寺の歴史を考えると、ある意味で重要な事実ではないかと思っております。

過日、寺史編纂の調査の過程で、文政年間に彦根藩士の岡見癡了という人が納経した法華経の筆写本の原物が発見されました、あわせてその岡見癡了のご子孫が現在も彦根市に在住されていることなどがわかって、私、先生方と現地に行ってお会いしてきました。この彦根岡見の系譜を見ますと、「東林寺」の項には「宗系断絶、ここにおわんぬ」といった記述がありました、やはり常陸の時代で両者の関係がいったんは完全に切れてしまったようにも見えますが、一方では、下野に移ってから、岡見を開基とする伝承を寺では連綿と保ってきておりますし、一族からの法華納経もおこなわれている。これはどんな風に考えればよろしいでしょうか。

〈関口〉

矢島先生がおっしゃったことは、長林寺は永高を中興開山としながらも、常陸時代の岡見家から数えて開基五百年と伝えていることをどう考えるか、ということだと思います。それは私も関先生と同じで史実に即していると思います。由緒書の中では七世の源室永高が中興開山とされていますが、東林寺を山川に再興するのに相当な資金が必要だったはずですが、でも、決して再開基というのが出てこないことは、どの由緒書を読んでも同じです。江戸時代以降も、長林寺にとって岡見氏との関係が重要だったことは間違いないんじゃないでしょうか。上杉伝説が江戸時代に成立していないことも、それと無関係ではないと思います。

ただ、くだいようですが、伝説はその時代の産物、歴史的苦しみの中で生み出されたものであり、それ自体、長林寺に関わって生きた人々が産み落とした文化遺産ですから、保存の必要があります。史実と文化遺産としても伝説は分けて考えるべきではないでしょうか。蛇足ですが。

〈矢島〉

ありがとうございます。それからもう一つ、司会の尾崎先生がご本山の『住山記』を資料に用いて、長林寺の本末関係や歴代住職について検討されていますが、まだ触れられておりませんので、これについて少しお話いただけますか？

〈司会〉

今回『仏教文化研究所紀要』の十号が出ましたが、そこに長林寺に関する論考を載せました。曹洞宗には、總持寺に一夜住職として地方から上がることが瑩山禪師以来あるのです。主に機能するのは戦国末期からであり、特に

江戸時代に盛んになります。その記録が、『住山記』という書の中に記録されているのですが、その中には長林寺関係の住職が多数上がっています。実際に長林寺から『住山記』に記録されている一名以外に、世代表の一五世の至心朔道がいます。さらに一八世の活翁禅龍が源光寺、二十世と二一世が大乗院、二二世が源光寺の出身です。これらの寺院は、樺崎地区で廃寺になっていて住職の記録が残っていません。『住山記』には上がった寺名と師僧の名が出ていますので、源光寺・大乗院から住山して長林寺に上がることがわかりました。つまり、廃寺になっている寺は長林寺にとって重要な位置を占めていたことが『住山記』の記録の中からわかってきました。『住山記』は師僧の名前が記録されているので、その法系までわかるということです。実際に長林寺が足利でどのような地位を占めてきたかを知るうえで、『住山記』は大きな資料です。

矢島先生に質問があります。大般若経の寄付者の図で面白いと思ったのは、梁田宿には長福寺、洪垂村には高澤寺があります。ここに樺崎の村が出ていないこと、もう一点は、渡良瀬流域に広く分布していますが、お膝元の山川村からは少ないです。これらの関係をどう考えられますか。

〈矢島〉

大般若経の奥書につきまして、私は非常に不思議に思っていました。山川村の寄付者がほとんどおらず、梁田や野田、大沼田など周辺の村の人たち、また遠く江戸の人の名前さえ見られるのは、いったいどういうことなのだろうか。長林寺で勧進し、寄付を募ったのなら、檀家の多い「当所山川村」の人の名前がもつとあるべきなのにな、と思っておりました。ですから、このたびの寺史の研究をお願いするまでは、私にはなにがなんだかわけがわからなかったというのが実際です。私は、この大般若経はどこかからもらってきたんじゃないかとさえ思っていたので

す。奥書をご覧になって、これはそうじゃないということを明快に説明して、謎解きをして下さったのは皆川先生です。ですから、いまのご質問は、皆川先生にお答えいただいた方がよいでしょう。山川村に寄付者が少ないのはなぜかといった点、どうでしょうか。ちなみに、梁田村などは、昔から長林寺とは道了尊との関係で緊密であったようです。

〈皆川〉

この表は、「大般若経」に記された地名や人名が判読できるものから作成してあります。この時の寄付者や寄付額を記した「大般若再勸化簿」の記載事項とあわせれば、もう少し違う傾向が見えるかもしれません。

山川村の寄付者が少ない点ですが、明治十九年（一八八六）の「寺籍財産明細帳」などによりますと、江戸時代の長林寺檀家は百二十軒ほどであったと記されてあります。報告でも話しましたが、十七世紀から十九世紀中期に存在した修験的な宗教者の存在やその活動から判断すると、長林寺は修験的な性格の強い寺院であった可能性が高いと考えられます。また、長林寺の本堂に掲げられている弘化四年（一八四七）の本堂再建費の寄付者を書き上げた「殿堂再建寄付名單」がありますが、檀家と同数の檀家外の寄付者が存在します。したがって、長林寺は従来いわれてきた寺檀制度により維持されてきた寺院ではなく、修験的な活動を通じて、寺檀制度の枠を越えた人びとや地域によって支えられてきた寺院ではなかったかと考えています。これは長林寺だけの事例であきらかにできる点ではないので、今後近隣寺院も含め検討していきたいと考えております。

なお、尾崎先生に質問ですが、長林寺の末寺である大乘院などのあった樺崎地区ですが、この樺崎には真言宗鏝阿寺の奥の院として、江戸時代も樺崎寺を中心に寺院群があったと思います。この様に、真言宗の勢力の強い地域

に、長林寺の末寺が形成された背景についてはどう思われますか。また、近年足利市教育委員会の樺崎地域の発掘調査などにより、大乘院などの跡地が分かっておりますが、その立地した場所も含め、お考えをお教えください。

△司会△

全くわかりません。無量寺は残っています。その他の寺院は、場所もまだ特定できていないようです。

他に、会場で質問はありませんか。時間も大幅に超過してしまいました。これから曹洞宗教団の展開を考える上でも、様々な資料を検討し、それを通して地域社会と権力との関係等を見直すことにより、今回の場合は長林寺を中心にしましたが、一層、曹洞宗全体の問題点、特徴が明らかにされるのではないかと思います。

長時間に亘りまして、ありがとうございました。

それでは閉式の言葉を本研究所の主任であります矢島先生より、よろしくお願いいたします。

本日は長時間にわたり、シンポジウムにご参加いただき、ご静聴いただきまして、大変ありがとうございます。昨年について二回目の公開シンポジウムでございましたけれども、私思いますのに、本研究所は、こうした總持寺教団や曹洞宗寺院の地方展開について研究をおこなう上で、とくに好位置にあると申しますか、恵まれた環境にあるように思います。たとえば、ご本山總持寺に所蔵される「住山記」のような貴重資料も、現在私どもでデータベース化の作業を進めさせていただいております。また寺院に残されている歴史資料は、信仰資料も含む多様な資料で構成されているわけですが、そうした多様な寺院資料を研究するには、さまざまな分野の研究者が必要です。その意味で本研究所は、文学部文化財学科の先生方を中心に豊富な陣容を誇っており、研究を促進していく上で大

変恵まれているといつてよいかと思われまゝ。

長林寺の歴史資料の研究も、この文化財学科が受託して、数年来行なつてまいりましたもので、はじめに紹介しました通り、まもなくその成果が一冊の本として出版されることになっておりますが、全国に曹洞宗寺院は実に一万四千ヶ寺ほどございます。そうした寺院に残されている歴史資料を読み解き、教団史の研究を行なつていく上で、今後この長林寺に関する受託研究の成果が、ひとつの良いサンプルとなつて、さらに研究が進められて行けばとひそかに期待するものです。

見えなかつたものが見えてくると申しますか、このたびの長林寺の寺史編纂事業を通じて、中世から近世の時代へと長林寺がどのような歴史を歩んで行つたか、これまで不明であつた歴史がようやく見えてきたように思われまゝ。そして、その時代その時代の社会状況や政治状況の中で、いろいろな出来事に遭遇しながらも、法灯を懸命に守り、受け継いできた寺院の歴史というものが徐々に明らかにされ、こうした研究の積み重ねによつて曹洞教団の地方展開の実際の姿も、少しずつ見えてくるように思われます。先生方のご努力によつて、長林寺という一地方寺院の歴史が解明され、その成果が学術書として出版されるということは、今後の曹洞宗教団の地方展開に関する研究のための一つの布石として、大変意義深いことではないかと存じます。

当研究所では、こうした公開シンポジウムや講演会を、今後とも開催してまいりますので、またどうぞお運びをいただきたいと存じます。また、あまり部数はございませんが、研究所の紀要の最新号も出来上がっておりますので、ご関心のある方はどうぞお持ちいただきたく思います。あわせていくつか関係の書籍のご案内もさせていただきますいておりますので、お帰りがけにご覧いただければと存じます。

それではみなさま、本日はありがとうございます。これで終了させていただきます。